[redacted]

里居

美知代

蛇二疊

凄き名かな、こは我が書齋なり。

騒がしき母家とはかけ離れて別に一棟、せまき廊下をくの字形に、其奥まりたる湯殿に降りて、此處はもと化粧室なりしを、久しう用ひもせず、幼き妹の無理云ひてむつかる折々泣かば彼の二疊に押込めん、さらば横手の竹藪より、大なる蛇幾つと無く出て來て、そなたをかむべきにとおどしたりし儘、かくは呼び習はしぬ。

此處には庖厨に皿洗ふ音もなく、かしましき婢女の聲もきこえず、時は秋の早や木枯立ちて、植込はさながら海洋(わたつみ)の如、大浪今にも寄するかと疑はる。常ならば心あがりの詩興もあるべく、或は油注ぎても夜一夜書讀みて明すべきを、今宵は云ひ知らぬわびしさせぐり來て、狂ほしの胸はあはれ靜坐するに堪へず。

然れど、よく我が里居の故を知り給ふ君は、いまの我がこもり間に相應しとのたまふか。蛇二疊。

さるにても凄き名とは思さずや。

炬燵

炬燵切るはいつの年も、必ず猪の子祭りの日と定まりて、若し早まりて戌の日にしたらんには禍あるべしと、こはひとり我が家のみならず、備後一圓ふるくよりの習慣(ならはし)なり。

常ならば如何でさる事のあらんやと、堪(たゑ)へ情も無くさかしらぶらんの弟すら、丙午と云ふ事の、春以來兎角驚ろかるゝことのみ多きに、底氣味惡しければか、四月二つありて、いたくも節の後れたる今年は、寒さわきてつよく、つけな洗ひし夜なんど、みぞれ交りの白きものさへ、ちらりほらり、堪へぇぬつめたさ、それをも忍びて音無しう、僅かに安火抱きて微笑むなりき。

然れど待ち兼ねたりし猪の日は今日こそ來りぬ。

われは例の書齋に、普通(なみ)よりも少し小さきを切りたれど、さらでもせまき二疊間の、書物はすべて左手に積み重ねたる、こじんまりと心地あしからず。

いざさらばお炬燵あたゝかに、夜すがらを愛誦の集にふけらばや——。

鉦皷

興深き夜や。

鎮中祭りも早や明日とはなりぬ。

筆に勞れ、書にもうみたり、少しく逍遙ふべきかと庭に下りたてば、高晴れし空には一面の星、月はなくて、折々の風に降るかとゆらめき、枯葉一つ落つる音もなし。

素よりわれは厭世染みたり、君がそしりも無理ならず、然れど敬虔にはた靜寂に、何響へんやうもなきかゝる夜、かゝる折、誰か無上の寂寞につれたるよろこびを胸に得ざらんや

暫は思ひ沈みて、われをも解(わ)かず、俄かの心あがりに驚けば、我が胸のゆらぎにつれて、はるかに聞(き)ゆる鉦皷のひゞき。

あゝそは明日の祭のならしなるらし。